

「やりたいこと」に基づく大学生の進路選択(1)

松浦 美晴

Career decision-making of university students
as materialization of their “Yaritaikoto”(1)

Miharu Matsuura

key words: university students, career, YARITAIKOTO

大学生の就職活動の背景にある現状

わが国の企業の新規雇用においては、新規学卒時の一斉採用が定着している。そのため、大学生は卒業を前に一斉に就職活動を行うことが一般的である。

2002年から回復が続いたわが国の景気は、2008年の金融危機をきっかけとする世界的な景気後退の中で急速に悪化した。同時に、雇用情勢も急速に悪化している。厚生労働省(2009)によれば、2009年5月の完全失業率は5.2%、完全失業者数は347万人となり、大卒就職率は2008年の96.9%から2009年の95.7%へと落ち込んでいる。2010年の新規大卒者の採用計画について、2009年より「増加」とする事業所割合は減少しており、文科系大学卒で7%、理科系大学卒で8%と小さな数値となっている。日本経済新聞社(2008)の調査によると、主要企業の2010年春入社予定の大卒採用予定者数は、2009年春に比べ28.6%減ということである。

こうした厳しい雇用情勢の中、就職活動を行わなくてはならないのが、現在の大学生である。

進路選択における「やりたいこと」についての議論

以上の状況を背景として踏まえた上で、本論では、大学生の「やりたいこと」に基づく進路選択についての議論を紹介する。

2003年に大学生の進路選択について述べた若松は、その10年ほど前に就職活動の開始を間近に控えた文科系大学生に行った面接調査の結果から「好きな物事や趣味から希望職業を考える」という特徴を挙げた。また、安達(2004)は現代若者のキャリア意識の特徴として、「適職信仰」「受身」「やりたいこと志向」の3つを挙げた。適職信仰とは「そのうちきっと何かぴったりの仕事に巡り合うだろう、天職に出合えるはずだと、将来に夢や希望を抱きながら適職との出会いを待ち続ける傾向」、受身とは「将来なんてどうにかなる、あれこれ考えても仕方ない、そのときに考えればよいと、キャリア選択を自分の切実な問題として捉えることができない状態」、やりたいこと志向とは「好きなことや自分のやりたいことを仕事に結びつけて考える傾向」を指す。

「やりたいこと」への過度の拘りは進路選択を困難にするとし、生活の手段としての職業を「やりたいこと」と分けて考えることを推奨する意見もある(例えば、香山, 2004)。

それに対し、溝上(2004)は、「やりたいこと」にこだわる大学生の生き方を、必ずしも

進路選択を妨げるものとはしていない。

溝上は、1960年代から1980年代の青年の生き方ダイナミックスを「アウトサイド・イン」、1990年代以降のそれを「インサイド・アウト」と呼んでいる。なお、溝上は、対象を「大学生」ではなく「青年」として論じているので、以下の部分ではそれに従う。

アウトサイド・インとは、確固たる大人社会が存在する時代において、遊びや自己表現といった大人社会からの離脱を志向しながらも、大人社会へ参入していこうとする青年たちの生き方を指す。溝上は、アウトサイド・インによって1980年代までの青年は内面の志向がどうであれ、将来・人生の保障を得ることができたという。

ところが、1990年代以降の日本経済の構造的崩壊により、青年が参入すべき大人社会の権威が失墜し、アウトサイド・インによる将来・人生の保障は得にくいものとなった。代わって生まれたのがインサイド・アウト、すなわちまず自らの内面からやりたいこと・将来の目標を定め、それを実現できる職業世界に出ていこうとする生き方である。溝上は、アウトサイド・インとインサイド・アウトのどちらでも、可能な生き方で進路を決定すればよいとしている。

さて、溝上によれば、インサイド・アウトによる生き方の利点を享受できる青年とできない青年がいるという。インサイド・アウトにおいては、主体の判断や決定が重要となるが、主観的な内面世界から出られないタイプの青年においては、その判断や決定には限界があり困難を伴うというのである。上述の安達(2004)は、大学生の質問紙への回答と実際の行動の間の不一致を指摘し、大学生は「(キャリアについての)意識はあるが行動できない」としている。「適職信仰」「受身」「やりたいこと志向」という3つの特徴がそろえばまさに、インサイド・アウトの困難につながるといえよう。

溝上は、インサイド・アウトの生き方に必要な作業として、2つを挙げる。第1は、やりたいこと・将来の目標と、周囲のさまざまな要素、例えば「性格」「努力」「能力」「周囲からの評価」「雇用の現実」「コミュニティにおける存在や貢献」との間に結合関係を作ることであり、そのためには、自ら行動することで現実世界と触れ合う必要があるという。

第2は、行動に先立ち、やりたいこと・将来の目標を自己の世界において意味ある形で位置づけ、それを他者に向かって言語表現すること、すなわち「物語化」であるという。そこで語られるものは「やりたいことや将来の目標という表象に結合してくる過去や未来の表象が、『いま』『ここ』の場で意味として結晶化するものであり、いわば時間的展望とも呼べるものである」とされる。

これと同様に、フリーターのキャリア自立の支援について論じた下村・白井・川崎・若松・安達(2007)は、Savickasのキャリアコンストラクション理論に基づき、キャリア発達の可塑性について言及している。すなわち、社会的文脈と個人の間の相互作用によって、キャリア発達が生じるというのである。そしてそれは時間的展望の視点につながるとし、時間的展望の視点の展開が重要であると述べている。

Superの理論とインサイド・アウト

Super(1990)は、キャリアを生涯において変化するさまざまな役割の統合とその連鎖であるとし、個人の持つ複数の役割にわたる自己概念の枠組みをライフ・キャリア・レインボーとして表した。

このライフ・キャリア・レインボーに基づくKulenović & Super(1995)の比較文化研究は、日本人の調査対象者(Secondary Students, Higher Education Students, Adults)における、「関与」「責務」「価値期待」についての「労働者役割」「市民役割」「主婦役割」

という自己概念の順位が低く、「レジャーを楽しむ役割」という自己概念の順位が高いことを示した。さらにこの比較文化研究で日本人の調査を担当したNakanishi & Mikawa(1995)は、Adult manにとって最も重要な自己概念が「労働者役割」であるのに対し、より若いSecondary StudentsとHigher Educationにとって最も重要な自己概念が「レジャーを楽しむ役割」であることを示した。Nakanishi & Mikawaはこれについて、日本人が「ワーカホリック」であるとする海外での認識を覆す結果を得たとしている。ここにも、わが国の青年の生き方における、アウトサイド・インからインサイド・アウトへの転換が示されているといえよう。

さて、溝上(2004)は、女子大学生の生き方にも触れている。結婚後の生活をどうするかという問題は、男女雇用機会均等法の施行と改正を経た現在においても、女子学生の生きる方向性を見定める大きな要因となっているとする。出産によりキャリアが一時的に途切れるというデメリットは避けられず、結婚をする、しない、ということさえ女子大学生の人生形成上の大きな問題の1つであるというのである。つまり、女子大学生にとって、さまざまな役割を人生の中でどのように位置づけてゆくかということが大きな問題であるといえる。

インサイド・アウトの生き方による進路選択の課題

インサイド・アウトの生き方を選ぶならば、「やりたいこと」に修正を加えながら実現可能な進路を作り出してゆくことが必要である。

溝上(2004)は内面世界の欲求から来るやりたいこと・将来の目標へのドライブ(動因)となるものとして、「経済的事情により自立を迫られること」、「女性においては性役割の圧力をかけられること」を挙げている。これは、さまざまな事情により内面世界の欲求を押しつぶされるという危機感が、内面世界の欲求の実現への動機づけとなるといえることができる。

しかし、溝上は、進路選択を前にした大学生にドライブを与えるための具体的な対策は今後の課題である、としたままである。同様に、安達(2004)も、行動しない大学生が行動するために必要なものを提示してはいない。したがって、「やりたいこと」を進路選択に結びつける行動の動因が生じる条件を、今後において見出す必要がある。

この課題について、サトウ(2009)が有用な示唆をしているので引用する。

大学1年生の入学した年の4月は就職態勢の身体を作るような時ではない。たとえば、半年が過ぎ、後期になったとしても、事情は変わらない。相変わらず就職(活動)は身近なものではなく、入学から6ヶ月が過ぎていたとしても、大学生生活をする身体にとっては、就職活動についての時が立ち上がっていないに等しい。まだいいや、ずっと先のことだし、という感じであり、その意味で、入学からの6ヶ月間というものはいずれ就職活動をする身体にとって一瞬であり永遠である。ところが、それから2年経ち、3年生の10月になると事情は一変する。促進的記号(Promoter Sign)としての就職活動が立ち上がり、何月までに情報収集、何月からは会社訪問、のように刻まれた時が立ち上がるのである。「この6ヶ月間が勝負!」と思う学生がいるなら、まさに、クロックタイムとしての6ヶ月の過ごし方が問題となり、それは大学1年生の最初の半年とは一就職活動に関しては一全く異なる時の過ごし方となる。(中略)まさに刻まれた時、クロックタイムの発生が、人びとの生活に大きな影響を与えていたといえる。

現実には、たとえ「3年生の10月」になろうと、すべての大学生が行動を起こすわけではないことは明らかである。行動を起こすことのできる大学生は、そうではない大学生には足りない何かを持っていると考えられる。サトウの示唆の中には「クロックタイム」の発生（への認知）という時間的展望の視点が含まれている。

インサイド・アウトの生き方に時間的展望の視点が必要であることは、溝上（2004）、下村・白井・川崎・若松・安達（2007）も述べているのであるが、ここにサトウのいうクロックタイムへの認知という考えを取り入れることにより、「やりたいこと」を進路選択に結びつける行動の動因が生じる条件を捉えることができるのではないだろうか。

引用文献

- 安達智子（2004）. 大学生のキャリア選択 - その心理的背景と支援 日本労働研究雑誌, 533, 27-37.
- 香山リカ（2004）. 就職がこわい 講談社
- 厚生労働省（2009）. 平成21年版厚生労働白書
- Kulenović, A. & Super, D. E. (1995). The Five Major Life Roles Viewed Cross-Nationally. In E.D. Super and B. Šverko with assistance from C. M. Super *Life Roles, Values, and Careers*. San Francisco: Jossey-Bass. pp.252-277.
- 溝上慎一（2004）. 現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる 日本放送出版協会
- Nakanichi, N. & Mikawa, T（1995）. Work Values and Role Saliency in Japanese Culture. In D. E. Super and B. Šverko with assistance from C. M. Super, *Life Roles, Values, and Careers*. San Francisco: Jossey-Bass. pp.170-173.
- 日本経済新聞（2009）. 大学内定 来春28%減 10月18日朝刊
- サトウタツヤ（2009）. 時文化 厚生 サトウタツヤ（編著）TEMではじめる質的研究 - 時間とプロセスを扱う研究をめざして - 誠信書房 pp.185-200.
- 下村英雄・白井利明・川崎友嗣・若松養亮・安達智子（2007）. フリーターのキャリア自立 - 時間的展望の視点によるキャリア発達理論の再構築に向けて - 青年心理学研究, 19, 1-19.
- Super, D. E. (1990). A life-span, life-space, approach to career development. In D. L. Brown, L. Brooks, and Associates (Eds.), *Career choice and development*. 2nd ed. San Francisco: Jossey-Bass.
- 若松養亮（2003）. 進路選択の現状 現代のエスプリ42 フリーター 至文堂 127-138.